

晩秋の風

市川茂子

野薊のあざみの花屋にありて里山の遠き日思い求めて活ける

ロープウェイより見放みさくる山の紅葉は肅々として里に下り来る

街路樹の根方おちこち彼岸花時をたがえず咲きて華やぐ

台風の予報に老いの用心は彼岸会待たず墓参に出でぬ

いつの日か告ぐるべきこと抱きつつ早夫つま逝きて二十年経つ

芒の穂秋明菊など活けながら巡り来る時また重ねゆく

ハロウィーンのお化けに声を出しながらデイスービスに笑いひろがる

夕暮れのあわき陽ざしにあきつ飛ぶ心静かな一日の終り

路地を来て曲がるこの角扉ごしにハゼの実赤く小春日に映ゆ

晩秋の風に吹かれてほつほつとわくらば落ちる並木路をゆく